ガと チョウの お話

エスティーと デルフィーは、美しい 森で 幸せに くらしている、2ひきの イモムシです。2ひきは 親友で、何でも いっしょに しました。草の 中で 遊んだり、木に 登って おにごっこを したり、若葉を かじるのも いっしょです。

そんな ある日の ことです。エスティーと デルフィーが まゆを 作る 時期が 来ました。いつも そばに いたい 2ひきは、同じ 木を 選んで まゆを 作りました。見かけの ちがう 二つの まゆが できました。その 中で、2ひきは 深い ねむりに 落ちました。

何日も たって、エスティーが 目を 覚ましました。そして、どうしても まゆから 出たいという 強い 気持ちに なりました。力いっぱい おしたり けったり している うちに、ついに エスティーは まゆから ぬけ出す ことが できました。

思わず、エスティーは 声を あげました。「うわあ、すてき！　新鮮な 空気が、何て 気持ちいいのかしら！　うれしくて しょうが ないわ！」

エスティーは、デルフィーを 見に 行きました。「デルフィー！　まだ そこに いるの？」　エスティーは デルフィーの まゆの 周りを うろうろしながら、デルフィーを よびました。まゆには 穴が 開いていなかったので、エスティーは、友だちが 出てくるまで、そばで 待つ ことに しました。

今にも 日が くれようと していた その時です。デルフィーの まゆが 動き始めました。しばらく もがいた 後、デルフィーが 出てきました。

エスティーが 友だちに 声を かけました。「ハーイ！　ずいぶん 姿が 変わったじゃ ないの。一体 何が あったの？」

「エスティーだって、最後に 見た 時とは、ずいぶん ちがうわよ。」と デルフィーが 答えました。

「まあ・・・、わたしたち、羽が あるわ。」

「ホントだわ。」 そう 言うと、エスティーは 羽を ひらひらと 動かして みました。「空中を 飛ぶのって、きっと、すごく 楽しいわよ！」

しばらくの間、羽を のばしたり、ぱたぱた 羽ばたいてみたり した後、エスティーと デルフィーは、思い切って 木の 枝から 飛びおりてみました。すると、どうでしょう。うれしい ことに、2ひきは 羽ばたいて 空中に まい上がっただけでは なく、一つの 場所から 別の 場所へと、すばやく 移動する ことさえ できたのです。長い ねむりの 後、そんなに 自由に 飛び回れるなんて、2ひきは うれしくて しょうが ありません。

デルフィーが 言いました。「そろそろ 何か して 遊んでみたいわ。どこか 探検しに 行かない?」

「でも わたし、すごく つかれてきちゃった。それに、暗くなってきたし。わたしは、休むわ。」と エスティーが 答えました。

「そう・・・。じゃ、また 後でね。」 そう 言うと、デルフィーは 飛び去って いきました。

エスティーは 大きな 木の葉の 下に 止まって、ねむりに つきました。

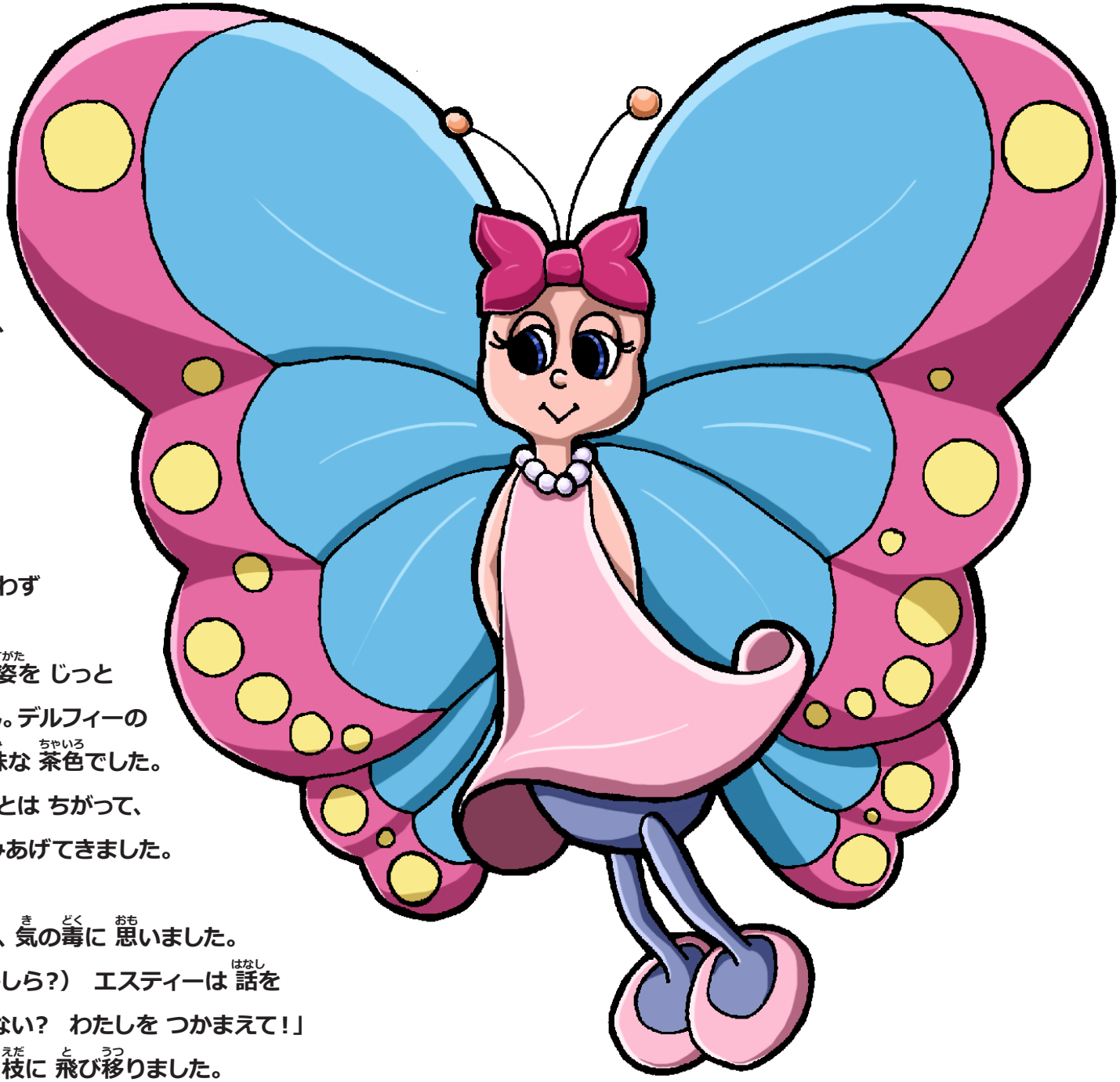
次の 日、エスティーは 朝早くから 目が 覚めました。楽しい 1日が 過ごせそうです。

「おはよう、デルフィー。よく ねむれた？　わたしは、ぐっすりだったわ。」エスティーは、となりの 枝に 止まっていた デルフィーに、元気いっぱいに 声を かけました。

「わたし、全然 ねてないの。一晩中、起きていたのよ。だから、今は もう、ねむくって。」と デルフィーが 答えました。

「そうなの・・・。じゃあ、あなたが 目を 覚ましたら、いっしょに 遊びましょう。」

何日か たって、エスティーと デルフィーは、
１日の 過ごし方が ちがう ことに 気が
つきました。エスティーは 夜の間 ねむり、
デルフィーは 昼間に ねむるのです。それで、
２ひきの 友だちは、イモムシだった 時のように
いっしょに 過ごせる 時間は、ずいぶんと
少なくなりました。けれども、２ひきは 毎日、
太陽が しずみ始めるころ、いっしょに 探検したり、
大きな 木の 茂みの 間を ひらひら 飛び回ったり
しながら、おたがいの 冒険話を 語り合いました。
　ある日の 夕ぐれ、２ひきの 友だちは、水面に
浮かんでいる ハスの 葉の 上に 止まって、水に
映っている 自分たちの 姿を 見ました。
　「わたしの 羽って、すごく カラフルだわ！」 思わず
エスティーが 声を あげました。
　けれども、デルフィーは 水面に 映った 自分の 姿を じっと
見つめながら、あまり うれしそうでは ありません。デルフィーの
体は 丸っこくて 毛が 生えていて、羽の 色も 地味な 茶色でした。
デルフィーは、色あざやかな チョウの エスティーとは ちがって、
ガだったのです。デルフィーの 目に なみだが こみあげてきました。
「わたしって、何て みにくい ガなのかしら！」
　エスティーは、悲しんでいる デルフィーを 見て、気の毒に 思いました。
（デルフィーを なぐさめるために、何が できるかしら？） エスティーは 話を
変えました。「ねえ、デルフィー！　おにごっこ しない？　わたしを つかまえて！」
そう 言いながら、エスティーは すばやく 頭上の 枝に 飛び移りました。



デルフィーは 友だちを 見上げて 思いました。（エスティーって、飛ぶのが すごく 速いわ。それに 比べて、わたしは 何て 不器用で のろまなのかしら！）

そう 思うと、デルフィーは ますます 悲しくなりました。

「わたし、今は 遊ぶ 気分に なれないわ。」　デルフィーは 口ごもりました。

エスティーは、偉大なる 創造主に お祈りを 送りました。「創造主様、どうか、デルフィーが 幸せに なれるように、お助けください！　デルフィーは わたしの親友なのです。どうか、彼女を 助けるために 何かを してください。」

創造主が エスティーの 祈りを 聞いて、言いました。「わたしは、デルフィーが 自分の 造られた 様を うれしく 思えるように、ある ことを 計画しているのだよ。」

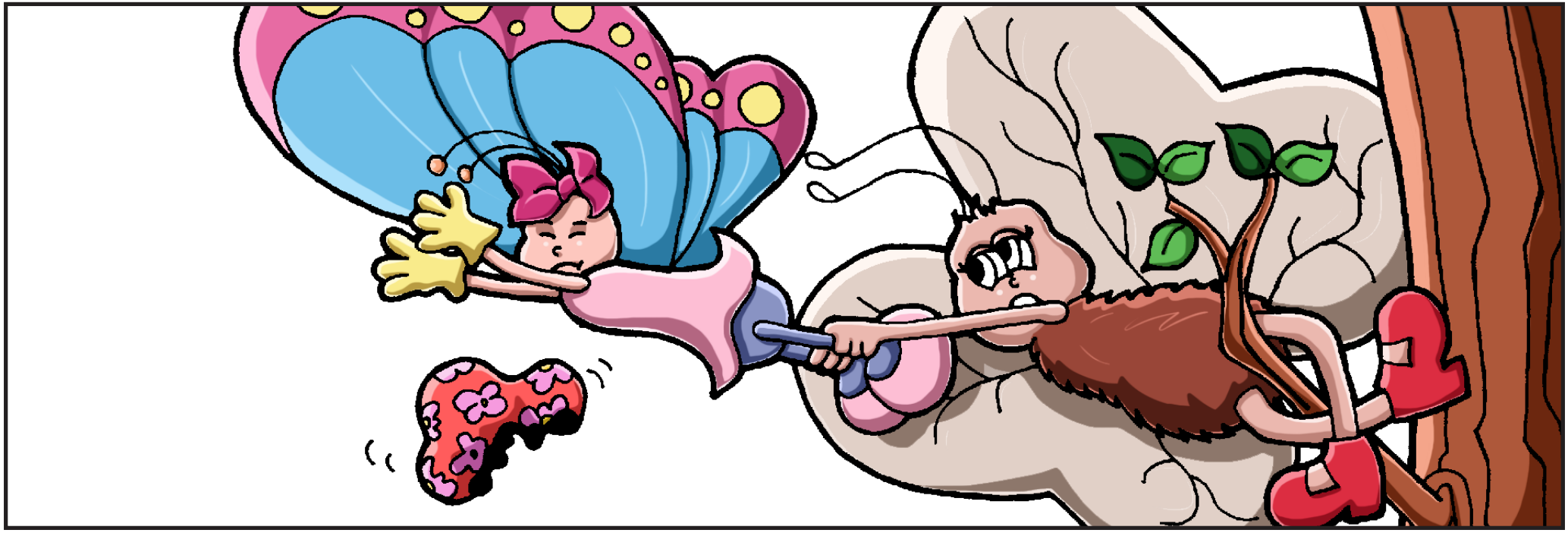
エスティーは デルフィーの 所へ 行き、元気づけようとして 言いました。「わたしの 親友で いてくれて、ありがとう。」

すると とつぜん、強い 風が ふいてきて、エスティーを さっと 空中に さらいました！

「うわー、デルフィー！　デルフィー！　助けて！　わたし、風に 飛ばされちゃうわ！」　エスティーが さけびました。

デルフィーは すかさず、エスティーを 助けに 行きました。できる限り 速く 飛んで、何とか エスティーに 追い付いて つかまえる ことが できました。エスティーを つかむと、デルフィーは、強い 風の 当たらない 石の かげまで、力いっぱい エスティーを 引っ張って 行きました。

エスティーは、自分を 助けてくれた 友だちを、心から 感謝しました。



「ありがとう、デルフィー！　あなたが わたしの 友だちで、本当に よかったわ！　だって、もし あなたが わたしみたいに 軽かったら、わたしたち、2ひきとも風に さらわれている ところだったもの。だけど、創造主様は、あなたに じょうぶな 体を 与えてくださったわ。だから、風に さらわれなかったんだわ！」

（確かに、エスティーの 言う通りだわ。わたし、自分の 造られた 様を 感謝すべきなのね！）と、デルフィーは 思いました。

少し はなれた 所で、少年が 虫取りあみを 手に、チョウを 追いかけながら 走り回っています。黄色い 花が さいている 所を 注意深く 見ていた 少年は、きれいな 羽の エスティーが ひらひらと 飛んできて 花に 止まるのを 見つけました。

少年は 虫取りあみを かざしながら、エスティーに 向かって 走って来ました。デルフィーが さけびました。「気を つけて、エスティー！　早く！　かくれるのよ！」

エスティーは すぐに まい上がって、できる限り 速く 飛びました。デルフィーは 少年の 気を そらそうと、少年 目がけて 飛んで行きました。

その 合間に、エスティーは 少年の 方から 見えない しげみの 中に 身を かくしました。少年は しばらく エスティーを さがしていましたが、やがて あきらめて、あっちの 方に 走って行きました。

今度も、エスティーは デルフィーに 感謝の 気持ちで いっぱいな ことを 伝えました。「ありがとう。わたしの 色は、あまりにも 人目を 引きつけて しまうんだわ！　今度も、わたしを 助けてくれたわね！」

創造主は 2ひきを 見て、ほほえみ ました。計画は うまく 行っています。「次に 起こる ことも、計画の うちだぞ。」

次の 日の 夕方です。エスティーと デルフィーは
顔を 合わせると、低い 木の 枝に 止まって、いっしょに
日の入りを ながめていました。そこへ、おいしい 食べ物は
ないかと、トカゲが 走って来ました。ガと チョウを
見つけると、チョウよりも ガの ほうが 食べごたえが
ありそうだと 思いました。そこで デルフィーに
飛びかかり、がぶっと かぶりついたのです！ ところが、
トカゲは すぐさま デルフィーを はき出しました。
「うへ！ 何て マズいんだ。」 大声を あげると、
チョウの ほうを さがしました。「もう 1ぴきは、どこへ
行ったんだ？」 トカゲは エスティーを 見つけようと
辺りを 見回しましたが、もう いません。今度も また、
2ひきは 危険から のがれる ことが できたのです！

2ひきの 友だちは、ホッと ため息を つきました。

それからと いうもの、デルフィーは、チョウに
生まれていれば よかったなどとは 思わなく なりました。
創造主が 自分を このように 造られた ことや、創造主が
くださった 特別な 才能を、心から 感謝するように
なったのです。

エスティーと デルフィーは、いつまでも、最高の
友だちで い続けたのでした。

寄稿：アリーヤ・スミス、トム・Eの著書の編集　絵：ニコール
彩色：キャサリン・リンチ　デザイン：ステファン・ミーラー
出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2012年、ファミリーインターナショナル
“The Moth & the Butterfly”--Japanese
http://www.mywonderstudio.com/0-5/2013/8/19/the-moth-and-the-butterfly.html